

ふたたび「社会詠」論議の行方

「社会詠」、「時事詠」「戦争詠」などをテーマとするエッセイや論文を長いスパンで検索してみると、いわゆる短歌総合誌で幾度か特集が組まれているのがわかる。国立国会図書館の雑誌記事索引を占領期プランゲ文庫記事索引と国文学資料館データベース、手元の現物で補ってみても、「社会詠」という言い方定着したのは、一九六〇年、安保闘争が盛り上がった年である。「社会詠の方向をさぐる」「再論社会詠の方向について」「社会詠特集を読む」（『短歌』四月、七月、一十一月号）という特集が生まれ、単発のエッセイも一九六〇年に集中している。その関心の一過性も興味深いのだが、その後同誌で特集が組まれるのは四〇年後、「現代の『社会詠』はどう変わるか」（二〇〇〇年四月）、「短歌の『発言力』—社会詠は時代を捉えているか」（二〇〇七年七月）であった。なお、今回の作業で、「社会詠」の語が最初に見出されたのは一九四八年二月で、太田青丘「短歌における社会詠と象徴」（『潮音』）であった。

また「時事詠」は「時局詠」などの語とともに戦前から使われていたが、戦後の登場は、「明日の時事詠を求めて」（『日本短歌』一九五四年九月）という特集で、再登場は、二〇〇一年九月同時多発テロ事件以降であった。

- ・「テロと日本人と短歌」（『短歌現代』二〇〇二年二月）
- ・「短歌は社会・時事をどう詠むか」（『歌壇』二〇〇二年五月）
- ・「テロかく詠めり—時事詠の可能性」（『短歌朝日』二〇〇二年八・九月）
- ・「時事詠の可能性—疾駆する時事詠のいま」（『歌壇』二〇〇三年六月）
- ・「短歌に見る時代・世相」（『歌壇』二〇〇六年十一月）

『歌壇に』は、一九九五年一〇月「時代と短歌—阪神大震災・オウムを手がかりとして」の特集もあり、他誌に比べ社会・時事詠への関心の深さが読みとれる。また、「八月ジャーナリズム」などと揶揄される向きもあるが、次のような特集が貴重である。

- ・「渡辺直己と戦争詠」（『短歌』一九八三年九月）
- ・「防人の歌—古代から現代」（『短歌』一九九四年八月）
- ・「読みつがれるべき戦争歌」（『短歌研究』二〇〇七年八月）

「社会詠」「時事詠」「戦争詠」などの括り方が適切か否かも問題ではあるが、多くの歌人たちが社会に目を向け、社会事象を自らにひきつけて作品とする営為やそれを論ずる意味は大きい。日常的な意見交換や論争の場は大切にしなければと思った。たとえば、一九九一年から続く「八月一五日を語る歌人の集い」や『短歌往来』のかつての「君が代」特集や毎年一二月号のアンケート、同人誌の特集などにも注目した。その一つが加藤英彦「その先に一歩でる—最近の社会詠論争によせて」『Es』（一三号二〇〇七年五月）であった。「自分なりにある事件を考えぬくという作業を通して、その事件に触発された初期の感情の波動が微妙にうごく。それは新たな怒りであることも、名状しがたい悲しみである場合もあるだろう。そこから何を想像するか。そのときの感情の強度に支えられてどのような世界をわれわれは見るか。一首のもつ厚みや奥ゆきはそんな『時代を見る目』の反映であるように思える」は分かり易かった。同時掲載の詩人瀬尾育生「彼方で円環している」は、「政治と文学」については「棲み分け」を前提に「文学の遂行とはなによりも『作品』の遂行を意味しており、『作品』は主体の位置がどこにあるのかを明示することなし」では成立しないとするのだが、韜晦するような論調は私には難解であった。

（『ポトナム』2008年2月号所収）